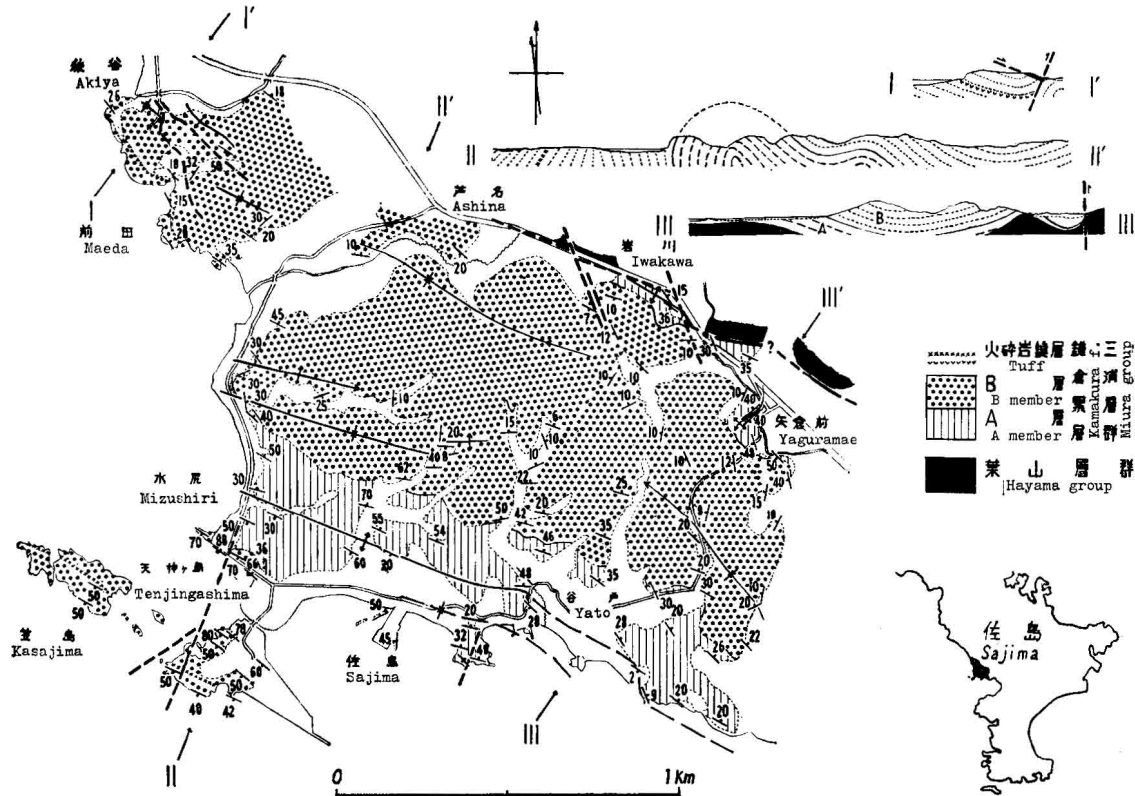


横須賀市佐島の地質図作成，1966 年より

顧問 蟹江 康光

私が、最初に佐島で地質図作成にフィールドワークを始めたのは1966年2月のことであった。横須賀市博物館が天神島臨海自然教育園を開設するのにあたり、天神島の地質調査を依頼されたが、周辺地域を含め地質調査を行った。1968年に発行を準備中の1/2.5万の「三浦半島」地質図の元図を見せていただき、佐島地域が国道134号線でブロック化され、褶曲を伴う複雑な地質構造に目をうばわれた。この構造を自分の目で確かめたく、きれいに印刷された1/3000の地形図上へ丹念に地層の走向と傾斜を記入した。この作業が、後の改訂地質図をつくるのに、役立つとは思ってもしなかった。



1966年に作成した地質図（蟹江，1967a）。

報告は蟹江（1967a, 1967b）として報告した。分布する地層は、葉山層群を不整合におおう三浦層群で、泥岩を含むA層と石切場のある凝灰岩からなるB層に区分し、それぞれが逗子層と池子層に似ているとした。不整合面の直上から後期中新世に対比される *Ammusiopecten iitomiensis* を見つけた。全体としてNWW-SEE方向の向斜構造をつくるが、褶曲軸は沈んでいる（プランジ）ことからNNW-SEE方向の構造を認めた。国道付近には北東側の葉山層群との境界にNWW-SEE方向の断層が推定され、武山断層と見なした。この断層はNW-SE方向の断層で切られていた。

横須賀市佐島，佐島が丘 Loc. 1

2003. 2. 20

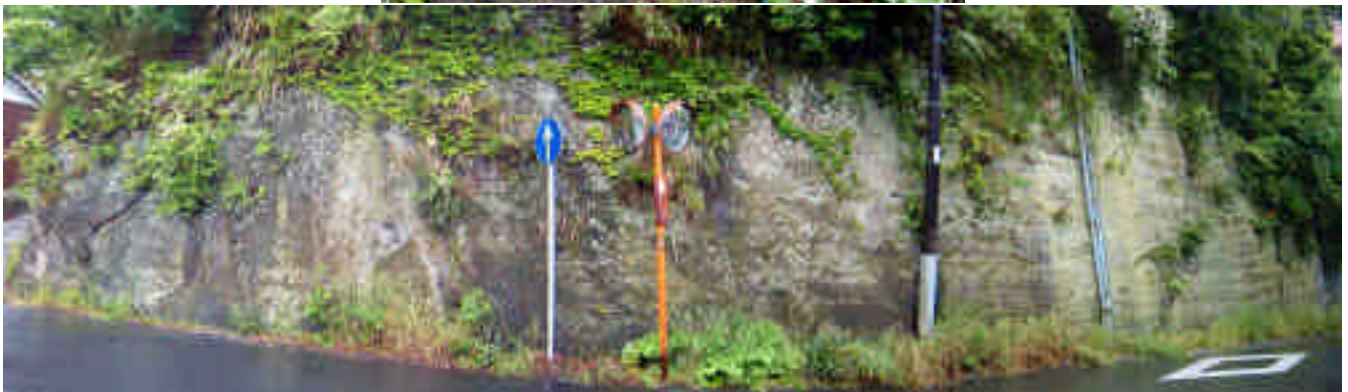
角閃石タフ

三崎層\初声層



1968年、博物館に就職して北西部の調査を続けた。ひとつは285mにわたって水平に連続露出する厚さ約3mの細粒凝灰岩鍵層Mr層と上下の地層の堆積学的観察であった。そこで7種類の堆積構造を記載し、その考察から堆積時における海の沖合は南西にあり、同方向の海底谷を推定した(蟹江, 1969)。二つ目は、ブナの葉化石の発見から花粉化石の分析結果を考慮して、海の後背地に丹沢山地のような地形を推定した(蟹江, 1970)。

2003年から地質環境部会では佐島地区の地層の見直しの調査を行い、これまでに次のことがわかってきた。2月20日と3月20日の調査で、A層とした地層は三崎層に、B層としたものは初声層にほぼ対比され、両層の境界の下にSoゴマシオ凝灰岩鍵層があり、地層を追跡するのに有効であった。三崎層にくらべ、初声層の傾斜はゆるく、これをおおうローム層はほぼ50m以上の高度に薄い小原台?層とこれに重なるTP軽石層を挟むローム層がのっていた。TP層はNNW-SSE方向の断層でブロック化しており、活断層と見なせそうなことが判明した。台地上部の調査は始めてであった。4月17日と5月15日の調査で南北方向の断層は佐島地塊を大きく3分することが判明した。すなわち芦名以西の北西ブロックは主に三崎層、中部ブロックは三崎層と初声層、大楠中学校以东のブロックには初声層が分布し、地層の配列は、西に下位層が、東に上位層となっていることが判明し、南側の長井地区における南北方向の三崎層と初声層の分布に関連がありそうである。5月15日と6月12日の調査は、武山断層を切る南北性の断層の性格を明らかにすることと、断層の活動時期を特定するようにした。



大楠小学校前に露出する三崎層。上の写真で枯れ草のはえているところが逆断層面で、下の写真の左(北東)奥に露出している。下写真左側の急傾斜層はこの逆断層で引きずられているが、右(南西)側では地層の傾斜は緩傾斜ないし水平近くなっている状態を観察できる。この逆断層は北西部と中央部のブロック境界となっている。

文献

- 蟹江康光 1967a. 三浦半島横須賀市佐島の地質。横須賀市博研報(自然), (13): 38-44.
- 蟹江康光 1967b. 横須賀市佐島地区の地質。横須賀市博雑報, (12): 1-4.
- 蟹江康光 1969. 三浦半島佐島の北方, 秋谷の第三系みられる堆積構造。横須賀市博研報(自然), (15): 37-43.
- 蟹江康光 1970. 三浦半島, 秋谷の第三紀層からブナ *Fagus crenata* BLUME の発見とその意義。横須賀市博研報(自然), (16): 30-34.
- 三梨 昂・矢崎清貴 1968. 三浦半島。日本油田・ガス田図, 6. 地質調査所。